令和五年度　鹿児島女子短期大学　社会人特別選考三期

入学試験問題　「小論文」（その一）

以下の記事で紹介されている「シェア図書館」の取り組みについて、あなたの考え・意見を述べなさい。

受験番号

「シェア図書館」個性並ぶ

区画貸し本棚に「マイ選書」　集う住民にぎわいの場に

有料で書棚のオーナーを募り、本を貸し出す「シェア図書館」が全国に広がっている。選本にオーナーの趣味や関心が反映されることで、公立図書館にはない個性が感じられるのが魅力だ。空き店舗を改装したり、カフェを併設したりすることで、地域の人々が集い、にぎわいを生む場としても貢献している。

さいたま市に今春開館した「ハムハウス」。移転した旧大宮図書館を改装した商業施設に入る。旧図書館で使われていた書棚などを生かし、カメラマンやミュージシャン、公務員といった50人ほどが選んだ本が壁一面に並ぶ。

7月上旬、動物に関する本などを借りた同市の福永晴奈さんは「（オーナーが）何に興味があるのかわかって面白い」と話した。初めて訪れたが、すぐに初期登録料550円を払って会員登録した。ハムハウスでは2週間に5冊まで自由に借りられる。

さいたま市の非常勤職員でハムハウス代表の宮本恭嗣さん（48）とデザイナーの直井薫子さん（33）が地域交流拠点を作ろうと始めた。「貸し借りだからこそ新たな出会いや、つながりが生まれる」と宮本さん。オーナーが本の入れ替えで来た時に利用者との会話に発展することもある。借り手が感想を書けるメッセージカードを用意するオーナーもいる。棚の貸出料は月３３００円だ。

オーナーの一人で会社員の奥村昌史さん（28）は「ここはスペースもあるので読書会を開いて本好きな人と関わりたい」という。同市に引っ越してきた今津美帆さん（43）は「周りに知り合いが少ない。地元とのつながりを持ちたい」とオーナーになった。収入にはならないが、活動ＰＲや自己表現の場として活用する人も多い。

過去2年半ほどで全国約30カ所に開設されたシェア図書館。ブームの火付け役は２０２０年3月、静岡県焼津市に誕生した「みんなの図書館さんかく」だ。地域交流や住民参画に取り組む団体の代表を務める土肥潤也さん（27）が、図書館の運営費用をまかなおうと月額２０００円の「一箱本棚オーナー制」を考えた。用意した約60区画の書棚は埋まり、キャンセル待ちも出ている。焼津市から50キメートル以上離れた場所に住む人専用に貸し出す棚も用意する。

寄贈された本を自由に閲覧・貸し借りできる私設図書館「まちライブラリー」から着想を得た。カフェや自宅の一角などでも気軽に始められるため、全国に９５０カ所以上あるとされる。

一般社団法人まちライブラリー（大阪市）代表理事の礒井純充さん（64）は逆に、土肥さんの取り組みに刺激を受けた。講演活動で縁のできた長野県茅野市で運営する「まちライブラリー＠Ｍｙ　Ｂｏｏｋ　Ｓｔａｔｉｏｎ茅

入学試験問題　「小論文」（その2）に続く

令和五年度　鹿児島女子短期大学　社会人特別選考三期

入学試験問題　「小論文」（その２）

野駅」内にシェア図書館を設けた。礒井さんは「対価を払っても地域と関係性を持ちたいと考える人が増えている」と話す。

シェア図書館は人口減少が進む地域の商店街や駅前の空き店舗などの活用策としても注目される。本を介して人が集い交流することで、にぎわいやコミュニティーの維持につながると期待される。

企業も注目する。沼津信用金庫（静岡県沼津市）は、ＪＲ沼津駅前近くの旧支店を改装して開いた起業家拠点の一部を「みんなの図書館さんかく沼律」に提供している。運営には職員らが協力してあたる。「赤ちゃんからおばあちゃんまで多様な人が訪れる風景が生まれた」（同信金の担当者）という。

孤独や孤立問題への対処という役割を担うシェア図書館もある。兵庫県豊岡市の「だいかい文庫」は、医師の守本陽一さん（29）が「地域の人の健康相談に応じ、高齢者や障害者など誰でも来られる居場所をつくりたい」と20年12月に開設した。オーナー約70人のうち一割強は医師や看護師など医療関係者で、健康関連の本も充実する。

カフェを併設し、健康や孤独に関わる悩みを聞く相談会も月数回開く。医師から発達障害や統合失調症を抱える患者の居場所として紹介されることもある。「引きこもりだった人が店番を始めたことで新しい仕事を見つけた例もある」（守本さん）。社会との接点を持つ場になっている。

全国のシェア図書館をつなぐ場も登場した。東京・大手町にあるビジネス交流拠点「３Ｘ３Ｌａｂ Ｆｕｔｕｒｅ」は３月、各地の館長らの推薦本を並べた本棚を設けた。数カ月に一度、館長同士の交流会も開く。

３Ｘ３Ｌａｂの館長を務める神田主税さんは「お互いの図書館をたずねるフィールドワークも企画したい」と話す。館長のほかオーナーは全国に一０００人以上いるとされ、今後は各地域にとどまらない新たな交流も広がりそうだ。

（伴和砂）

日本経済新聞・夕刊　２０２２年７月23日（土）

注　意　（１）字数は所定の原稿用紙三枚以内。時間は九十分。

（２）この紙の余白はメモ用紙として自由に使用してよいが、終わったら机の上に原稿用紙（小論文）と一緒に置いて、持ち帰らないこと。